



日本社会に根差したウェルビーイングの向上 ④

⑦ ウェルビーイング向上の着眼点

(1) 個人のウェルビーイング

- 組織や社会を優先して個人のウェルビーイングを犠牲にするのではなく、まずは個人の幸せを尊重
- 個人のウェルビーイングが様々な場において向上
 - ➔ 個人の集合としての場や組織のウェルビーイングの向上
 - ➔ そうした場や組織を社会全体に拡大



(2) 個人のウェルビーイングを支える要素

- 学力、学習環境、家庭環境、地域のつながり、など
- 非認知能力
IQや成績など、数値化できる認知能力に対し、それ以外の目に見えない力のこと。
(例) 気付く力、やり抜く力、人と関わる力、など

※ 2015年、OECDは非認知能力を「社会情動的スキル」と定義し、次の三つを提示

- ① 目標の達成 (忍耐力、自己抑制、目標への情熱 など)
- ② 情動の抑制 (自尊心、楽観性、自信 など)
- ③ 他者との協働 (社交性、敬意、思いやり など)

(3) 協調的幸福的捉え方

「同調圧力」につながるような組織への帰属を前提とした閉じた協調ではなく、他者とのつながりや関わりの中で共創する基盤としての協調

(4) 教師等のウェルビーイング

子供たちのウェルビーイングを高めるため、教師をはじめ職員や支援人材など学校の全ての構成員のウェルビーイングを確保

➤子供の成長実感 ➤良好な労働環境 ➤職場の心理的安全性 ➤保護者や地域との信頼関係

(5) ウェルビーイングを実現する社会

- 子供から大人まで一人一人が担い手
- 生涯学習を通じて、地域コミュニティを基盤とするウェルビーイングを実現
- 子供たちが幸福や生きがいを感じられる学びを、保護者や地域の人々と共に支援
 - ➔ 学校に携わる人々のウェルビーイングの向上
 - ➔ その広がりが、一人一人の子供や地域を支え、世代を超えて循環